

発達検査と対人援助学

⑪ 赤ちゃん調査員の育児回顧録

大谷多加志

2020年からは同志社大学赤ちゃん学研究中心で10か月児の赤ちゃんとその保護者を対象とした調査を行ってきました。今後、同じお子さんが1歳半、3歳になった時に再度調査にご参加頂く予定で、調査自体はまだまだ続くのですが、これまでに100名近い赤ちゃんとその保護者の方とお会いしてきました。私自身が威厳や威圧感めいたものを持ち合わせていないことや赤ちゃん用の検査用具の魅力も相まってか、幸いなことに、ほとんどの赤ちゃんは上機嫌で調査に参加してくれました。そんな中で、保護者の方から時折「赤ちゃんの専門家なら、さぞ上手に子育てをしてくれましたよ」というコメントを頂くことがありました。保育や教育の専門家が子育てや教育が上手かと言われたら「それは人による」としか言えないのと同じで、このような感想もほぼ幻想に過ぎないとは思いますが、そう言われたことが、10数年前の乳児期の育児を思い出すきっかけにもなりました。今回は少し趣向を変えて、改めてその当時の育児について書いてみようと思います。

予定日を巡って

30歳で結婚し、子どもが生まれたのは31歳の時です。その頃、心理系の学会でワーク

ショップの企画に関わっていたのですが、企画者の先生から「来年もやろうか!」とお声がかかったタイミングが、妊娠がわかった直後で、かつ学会の期日がほぼ予定日と丸かぶりという状況でした。正直どう考えていかよくわからず、行ける可能性はあるだろうかと妻に相談したところ、“ふざけんな”と一喝されました。企画者の先生に事情を説明し、当然ながらその年のワークショップは不参加としました。今考えれば、そんなこと聞いたら怒られるに決まっているとわかりそうなものですが、その当時は「ちょっと聞いただけやん…」とやっぱりピンと来ていない自分がいました。そのくらい現実味が薄かったのだと思います。この件、いまだに時々蒸し返されるくらいの失点になっています。

予定日を過ぎたけど…

妊婦健診には、2-3回に1回くらいのペースで一緒に行っていました。4D画像やエコー画像などを見せてもらったり、医師の説明も一緒に訊くのですが、お腹の子どもの様子は、よく言えばすくすく、率直に言えばぶくぶく大きくなっている風で、身長・体重とも大きめでした。特に大きいのが「頭囲」で、医師は『大きめですが、標準範囲で

す!』と、エコー画像の右下に記された「+1.8SD」という数字を指しつつ説明してくれました。“いやいや、+1.8SDなら、学年でもトップクラスというレベルででかいやん…”と思いつつ、医師が大丈夫というものをおもひに心配しても仕方ないかなと思っていました。「+2SDを超えたら、お医者さんは何って言うんだろうね」と話していたのですが、最終的に右上の表示が2SDを超えると医師もこの数字をさらりとスルーするようになりました。

そんなことがありつつも、基本的に経過は順調で、無事予定日を迎えました。しかし、予定日に産まれる兆候はなく、翌日も、そのまた翌日も…という感じで日々が過ぎていきます。予定日を1週間過ぎた41週目の健診も何の兆候もなく終わったのですが、半休を取って午後から出勤しようとしたところで陣痛が起り、再び産科に戻って、そのままお産に臨むという流れになりました。

テニスボールとツボ

陣痛の波が来ている間、看護師さんからテニスボールを渡され、妻の背中を押すように言われました。しかし、背中のどこを押したらいいものかわからないですし、そもそもテニスボールで人の体を押すということ自体が慣れない作業です。よくわからないなりにツボを探りつつ、必死に背中を押していたのですが、後日妻いわく「全然いいところを押さないのがムカついた」とのことでした。お産ってムズイです…。

Come On Baby 4000 Over!

頭囲が大きかったのでどうなるかと心配していたのですが、色々あって案の定の緊

急帝王切開となりました。初めての手術同意書にサインし、待つことしばし。無事産声があがり、4000g超えのビッグベイビーが誕生していました。

出産の数日後に、新生児室にいる我が子を見たのですが、同じ日に生まれた赤ちゃんと比べても二回りは大きく、何となく留年して異年齢のクラスに我が子がいるような気持ちになりました。

腰痛と腱鞘炎と…

出産から1週間後、母子ともに健康で予定通り退院となりました。しかしながら、妻は帝王切開での出産となったため、起き上がるのも辛いという状況。仕事もなかなか休める状況ではなかったため、何とか家事も含めてこなしていく必要がありました。出勤前に朝食と昼食、場合によっては夕食も準備して、冷蔵庫に入れてから出勤。帰り道にスーパーに寄って食材を買って帰宅…という日々でした。一日一日を必死で過ごしていたのですが、やはり結構堪えていたみたいで、この時期の記憶があまり残っていません。

4000g超えで生まれたことで思いがけず大変だったのは、「だっこ」です。体も大きければ頭も大きかった我が子はなかなか首も座りませんでした。また、寝かしつけは縦抱きでないと寝てくれなかったため、毎夜の寝かしつけの際の手首と腰の負担から、生後半年くらいは慢性的な腱鞘炎と腰痛に悩まされました。

児童虐待とわたし

これはどの家庭でも同じだと思いますが、やはり新生児期の寝かしつけは大きな負担

でした。1-2時間ごとに起きてしまい、授乳後は抱っこでしか寝ないのですが、寝つくまでに短くても20分、長ければ30-40分は抱っこし続ける必要がありました。



また、抱っこで寝ついた後は、起こさないようにベッドに置くという最後の難関が待っています。寝息を立てている息子を抱っこしつつ、もう少し眠りが深くなるまで待つか、このタイミングでトライするかと悩みました。決意を固め、爆弾処理班の気持ちで慎重に慎重にベッドに横たえようとしませんが、その途中で「ふえっ」と声が上がってしまえば、もうジ・エンドです。ああ…またここから30分だ…と絶望に包まれました。時には寝不足も手伝って、ベッドに置く直前で目覚めてしまった息子を、“やってられるかあ!!”と放り投げたくなる衝動に駆られたりもしました。

当時は児童福祉の現場で働いていて「児童虐待」という問題も日常の近くにありました。一方で、自分の子どもを虐待する親を“ありえない”、“信じがたい”としか捉えら

れていなかったのですが、自分が親となってひと月もしないうちに、児童虐待まであと半歩しかないところにいる自分を知ることになりました。

毎月の発達検査

おそらく、こんな子育てはどの家庭でも起こっているのだと思います。唯一、我が家が他の家庭と違ったのは、仕事柄、月に一度定期的に発達検査を行っていたことでしょう。普段の仕事の中で発達検査を使うことはあっても、0歳の赤ちゃんの検査を実施する機会は得られなかったため、自分自身にとって必要な経験だと思ったのが理由のひとつです。そして、今後の研修会などで使うための映像資料を撮っておく、またとない機会だとも思っていました。この時に撮影した映像は今でも研修等で用いていて、思った通りとても貴重な資料となりました。ちなみに、0歳の間はひと月に一度、1歳から3歳までは3か月頃、3歳から6歳までは半年から1年に一度というペースで検査を実施していました。我が子ながら、よく付き合ってくれたものだと、今さらながら感謝です。



離乳食開始

5か月頃から、離乳食が始まりました。最初はすりつぶした果物、野菜を数口食べさせるだけでしたが、ありがたいことにとてもよく食べてくれました。スプーンを差し出すと、口をカパッと開けて待っている姿が、まるで鳥のヒナのようでした。あまりにテンポよく食べてくれるので、調子に乗って次々と食べさせていたのですが、妻からは「スプーン入れすぎ！」と注意が。自分ではまったく気づいていなかったのですが、スプーンが口の中の方まで入って、微妙にえずいていました。

離乳食を始めたばかりの赤ちゃんは嘔吐反射が口の前の方でも起こります。そのため、大人で言えばのどの奥にスプーンが来た時にオエツとなる感じが、口の真ん中くらいでも起こるわけですが、その嘔吐反射が出ていました。知識としては持っていたはずなのに、全然気づかず食べさせる私と、オエオエしながらも食欲を爆発させる息子というトホホなコンビでした。

思い返してみるほど、とてもではないけれど「よい育児」ができているとは思えず、知識も完全に宝の持ち腐れというような日々だったと思います。でも時間が不思議なくらいゆっくりと流れる、思い出深い1年だったと思います。